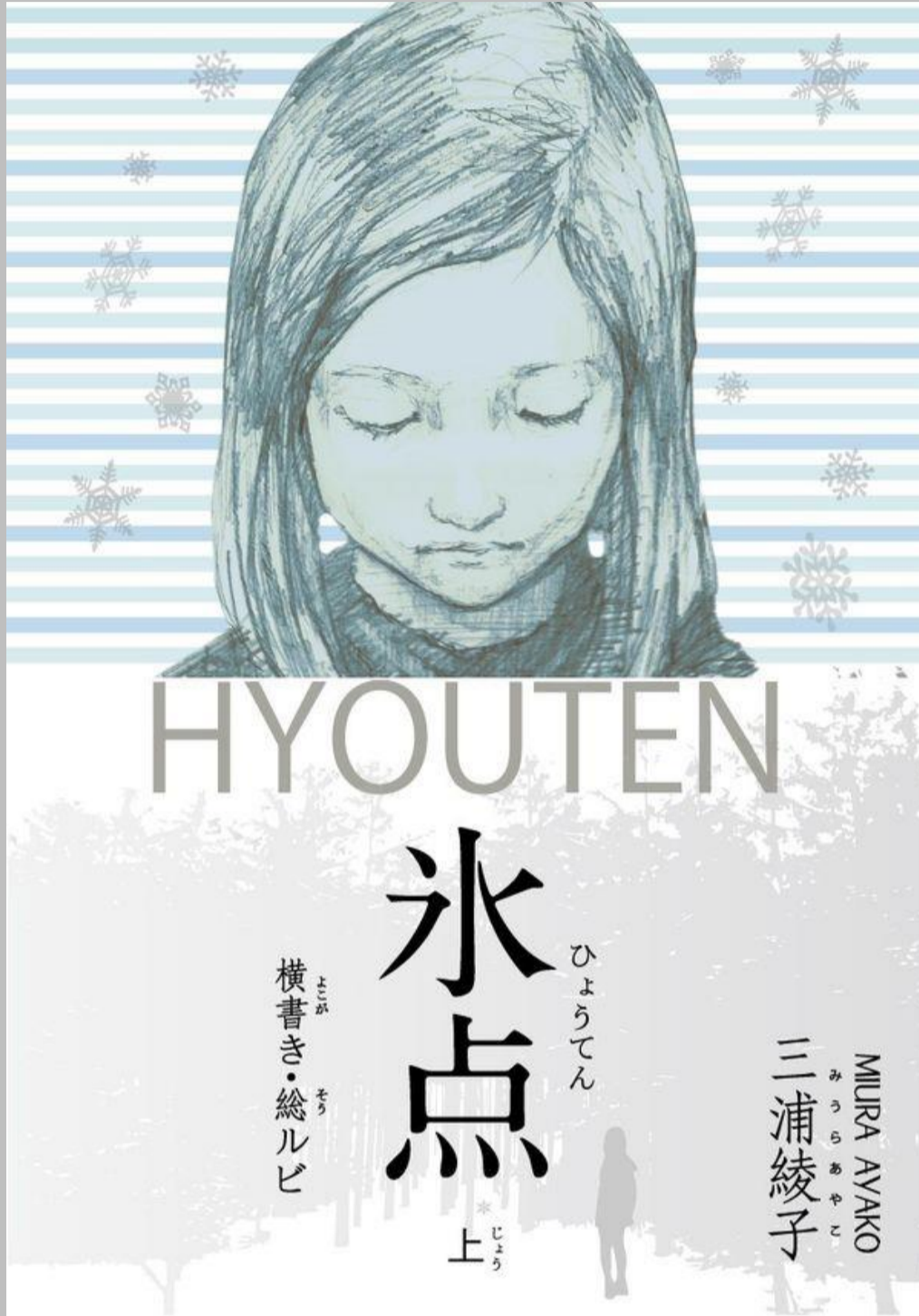


図書館だより

2023年度 第2号



2分で読める名著

「氷点」 三浦綾子

金本賢治校長先生がみなさんにおすすめしたい本として三浦綾子さんの「氷点」の紹介文を書いていただきました。

「氷点」は上下巻2冊の大作ですが、紹介文は2分で読めるようコンパクトにまとめられています。

紹介文を読んで全編を読んでみたくなったら、図書館に所蔵していますので、ぜひ読みに来てください。

三浦綾子略歴

大正11（1922）年、北海道旭川市生まれ。昭和21（1946）年、肺結核を病み、13年間の闘病生活をおくる。その間病床でキリスト教の洗礼を受ける。三浦光世と結婚。昭和39（1964）年、雑貨店経営のかたわらに書いた「氷点」がデビュー作となる。平成11（1999）年没。

本の紹介

紹介文

北海道旭川市在住の医師、辻口啓造は、妻の夏枝と息子の徹、娘のルリ子（3歳）と幸せに暮らしていた。ところが、ある日、妻の夏枝が別の男性と密会中に最愛の娘ルリ子が誘拐され殺される悲劇に見舞われる。夫婦は不幸のどん底に落ちるが、啓造は妻に密会の事実を直接詰問することもできず、内に大きな恨みを秘めて過ごしていた。ルリ子の代わりに女の子が欲しいとねだる妻に対し、啓造は妻には知らせずに、自分の最愛の娘を殺害した殺人犯の娘とされる赤ん坊を引き取る。女の子は陽子と名付けられ、妻である夏枝の愛情を一身に受けて明るく素直に育つ。啓造は、「この事実を知った時の夏枝の驚く顔が見物だ」と、妻への復讐を込めてのことだった。夏枝は、啓造が陽子をかわいがないことを不思議に思っていた。ところが、陽子が小学1年生になったある日、夏枝は書斎で啓造の書きかけの手紙を見付け、その内容から陽子が自分の娘を殺害した犯人の娘であることを知る。夏枝は陽子の首に手をかけるが、かろうじて思いとどまる。

しかし、もはや陽子に素直な愛情を注ぐことが出来なくなり、それ以後、陽子にいろいろな意地悪をするようになる。一方の陽子は、自分が辻口夫妻の実の娘ではないことを悟り、心に傷を負いながらも明るく生きようとする。

この辻口夫妻の実の息子である徹は、常々父母の妹に対する態度を不審に思っていたところ、両親の言い争いから事の経緯を知る。両親に対するわだかまりを持ちつつ、徹は陽子を幸せにしたいと願う。徹は、陽子のために自分は兄であり続けるべきだと考え、大学の友人である北原邦雄を陽子に紹介する。

陽子と北原は互いに好意を持ち、文通などで順調に交際を進める。しかし、陽子が高校2年生の冬、夏枝は陽子の出自を本人と北原に暴露する。辻口夫妻の娘ルリ子を殺害した犯人の子供が自

分であることがわかった陽子は、母の意地悪など、これまでのこと全てを合点する。そして、生きる権利のない人間だと悟った陽子は、夫妻に謝罪の手紙を残し翌朝自殺を図る。陽子は病院に担ぎ込まれ、いつ亡くなるかもしれない状況の中、陽子の本当の出自が明らかになる。陽子は殺人犯の娘ではなかった。それを知った啓造も妻の夏枝も、自責の念からただただ泣き叫ぶしか、すべはなかった。

この作品は三浦綾子のデビュー作で、「汝の敵を愛せ」（自分の敵を本心から愛しなさい）というキリストの教えが終始貫かれている。三浦が生涯を過ごした北海道旭川市には、この小説のモチーフとなった場所が点在している。人間は神にはなり得ない。が、「隣人愛」の考え方で生きることが必要なのだろう。十代の頃に読んだ心に突き刺さる1冊だった。